



中村 哲・尚子

Dr. Tetsu NAKAMURA
% Mission Hospital Peshawar
Peshawar, N. W. F. P
PAKISTAN

アフガン人患者の二重の苦難

一般にアフガン人患者は、この病気による重荷と同時に難民としての重荷をも背負っている。1986年から1987年春にかけて、多数のテロ事件が発生し、全てが難民のせいにされ、許可なしにペシャワールのバザールを歩き回ることさえ困難になった。1987年2月には大きな爆破事件をきっかけに<ペシャワール市民>が難民キャンプを襲い、既に武装しているキャンプは機関銃で応戦、市街戦の様相さえ呈した。患者は各キャンプから我々の病院にすることができず、“治療証”さえ発行せねばならなかった。治療脱落患者が増えるのは当然である。

我々の病棟でもアフガン人とパキスタン人の間に冷たい空気が流れていた。病院当局もまた、この圧倒的なムスリム社会の中で生きのびるにはパキスタン・ナショナリズムをかかげて<クリスト教徒・パキスタン国民>の位置を確保しなければならなかったから、アフガン人患者への風あたりは強かった。

1986年6月から8月まで私が研修のために日本へ帰っている間に、3名のアフガン人患者が<不法入院>で退院させられた。理由は、退屈しのぎにバザールをうろついたのみであったが「散歩できるほど健康な者に入院の資

格なし。」という無理無休なものであった。その上、この退院患者のうち2名が死亡、1人は消化性潰瘍による吐血、1人は虫垂炎として手術を受け、術後死亡していた。手術を受けた患者は、公営病院で若い医者のトレーニングに使われたという噂が広まり、私が9月にペシャワールに帰った時は、殺気だった空気が流れていた。柄にもなく、「復讐すべからず。」という言葉がこの時ほど熱をこめて人に説いたことはない。復讐はN.W.F.P.とアフガン人社会の中では当然の慣習法であったから、心ない病院当局のしうちに対して院内で殺傷事件が発生しても、誰も怪しまなかったであろう。

これは氷山の一角である。このような事態はすでに前々から予測されていたことであった。そこで私の結論としていたことは、①患者の生活に対する不安をとり除くことなしに、管理ばかりを強行するのでは解決にならぬこと。②この問題の抜本的な解決をはかるために、特別にアフガン人の手による別動隊を組織し、難民救済各機関に働きかけ、その福祉機能をフルに利用、早期発見・継続治療の努力もあわせて行わせること。であった。私としては、これ以外に解決策なしとみて取り組んだ。

ともかく、このアフガン人患者の間

題をぬきにNWFPのレプロシー・ワークはなりたないし、同時に手のつけにくい難問でもあった。なお、女性患

者の発見率が低いこと、治療継続の難しいことは、N.W.F.P.以上のものがある。

ペシャワール会 4 年間の歩み

信仰や立場を異にする様々な人々がペシャワール会に集い、中村哲医師のハンセン氏病撲滅の働きへの支援活動を通して思いを一つにしつつあることは、現代では奇跡とも思われます。その芽は中村兄が1978年チリチ・ミール登山隊の一員としてパキスタン北西辺境州を訪れた時に芽ぶき、1981年JOCSによってペシャワール市のミッション病院での活動が具体化され、それらと歩調を合わせて、1983年5月に九州での支援団体としてペシャワール会が結成されました。

ペシャワール会は、その発足にあたって九州の諸教会、福岡登高会、国立肥前療養所、福岡YMCA、アジアを考える会、福岡徳州会病院等が母体となり、現在2,000人余りの会員で運営されています。各々その賜物を生かしつつ、中村医師との有効な連帯の在り方を模策しつつ賑やかに活動しています。中村兄は、1984年5月現地に赴任して以来、パキスタン国内や隣国アフガニスタンをめぐる複雑な政情や宗教上



の困難の中で、ハンセン氏病棟の整備、病状を悪化させる生活習慣の改善、足底潰瘍の予防と患者の自立のための靴工場の建設、アフガン難民も含めたハンセン氏病の調査・活動計画を進めています。最近の活動の中で特筆すべきことは、山間部診療に不可欠のジープの入手にあたってジープ・キャンペーンを進めたことです。会員の働きの結実で近々実現の運びとなり感謝しています。

ペシャワール会 宮崎 信義